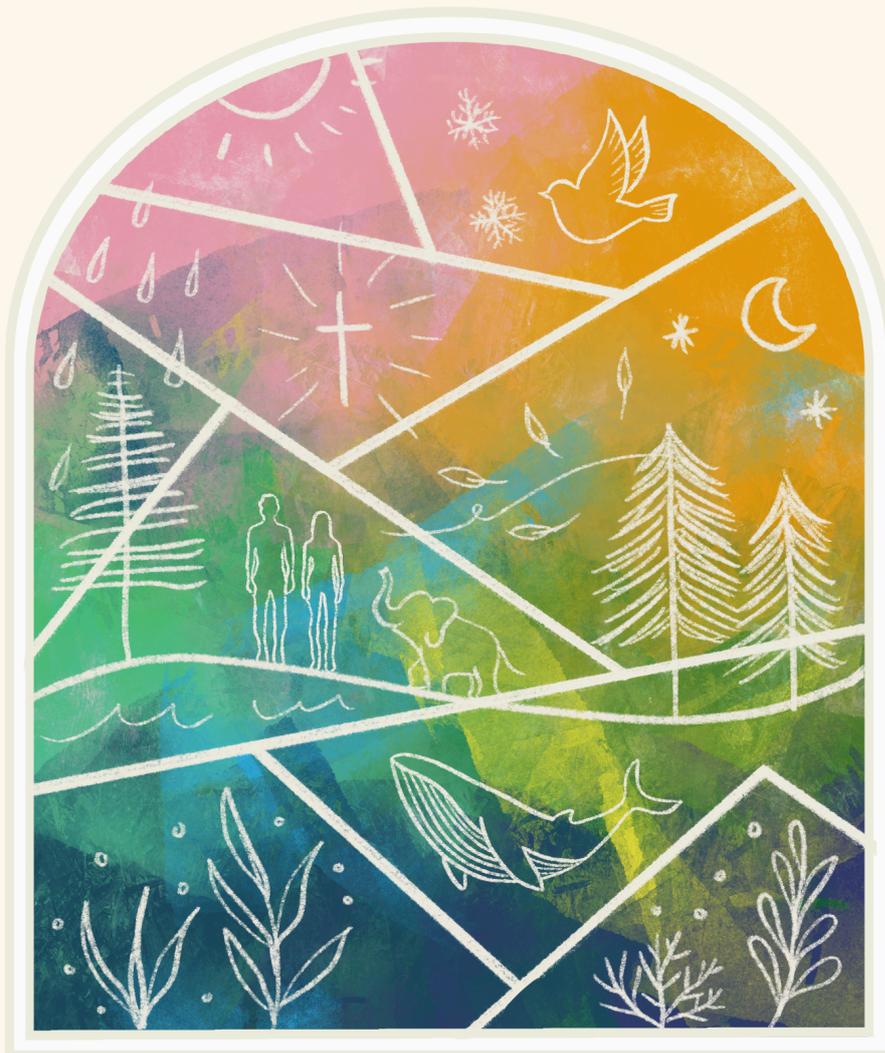


2025年度 成人科テキスト

# ぶどうの木

第6号



神はお造りになったすべてのものを御覧になった。見よ、それは極めて良かった。夕べがあり、朝があった。第六の日である。第七の日に、神は御自分の仕事を完成され、第七の日に、神は御自分の仕事を離れ 安息なされた。この日に神はすべての創造の仕事を離れ、安息なされたので、第七の日を神は祝福し、聖別された。

創世記 1 章 31 節・ 2 章 2-3 節

名前 \_\_\_\_\_



# 常盤台バプテスト教会 「教会の約束」

私たちは、神のめぐみによってイエス・キリストを主と信じ、バプテスマをうけて、主の教会に加わったので、聖霊の助けにより喜んで互いにこの約束をいたします。

私たちは、聖書が信仰の規範であることを信じ、その教えに従います。

私たちは、この教会が人によって成ったものでなく、神によって成ったものと信じます。

私たちは、主の日の礼拝を守り主をたたえ、教会の集まりにつとめて出席し、バプテスマと主の晩餐の二つの礼典を守ります。

私たちは、教会のきよくなること栄えることを祈り、主にある兄弟姉妹の愛をもって愛しあい、互いの喜びと悲しみを共に分けあいます。

私たちは、この教会をささえ、全世界に主の福音をのべ伝え、神のみむねの行われるために、喜んで奉仕し、献金をいたします。

私たちは、日々の祈りと家庭の礼拝につとめ、神よりあずかった子どもたちをみむねにそうように教え育てます。

私たちは、きよい心と正しい行いをもって、まことの道をあらわし、隣り人を愛し人々を救い主に導きます。

私たちは、主と会う日まで、この約束を守ります。



- 2/8 第33課「隣り人を愛し」
- 2/15 第34課「人々を」
- 2/22 第35課「救い主に導きます」
- 3/8 第36課「主と会う日まで」
- 3/15 第37課「この約束を守ります—神との誓約—」
- 3/22 第38課「この約束を守ります—会衆との誓約—」
- 3/29 第39課「『教会の約束』—全体のまとめ—」

執筆担当：【第33～35課】宇佐美 典子 姉 【第36～37課】森 崇 牧師

【第38～39課】友納 靖史 牧師

表紙イラスト：友納 聖子 姉

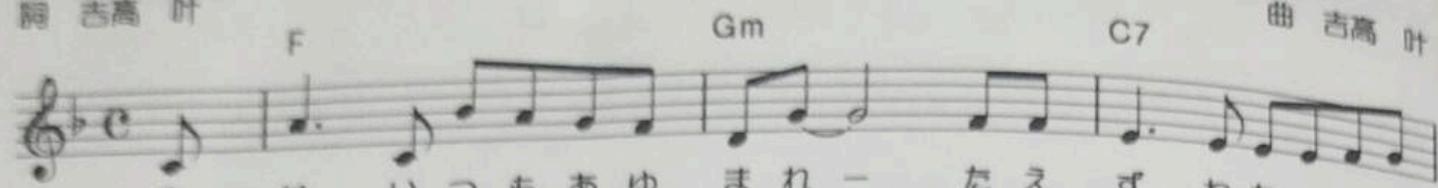
## 参考図書

- 「バプテストの教会契約」 1993年 村椿真理 ヨルダン社
- 「教える喜びと学ぶ喜び」 2009年 朴永基 いのちのことば社
- 「バプテストの信仰」 2015年 日本バプテスト連盟宣教研究所
- 「人生を導く5つの目的」 2015年 リック・ウォレン PDJ
- 「聖書教理がわかる94章」 2016年 J・I・パッカー いのちのことば社
- 「バプテスト教理問答書」 2004年 鈴木昌 訳編 東京聖書教会
- 「10代から始めるキリスト教教理」 2022年 大嶋重徳 いのちのことば社

# 向こう岸へわたろう

詞 吉高 叶

曲 吉高 叶



1. 主はいつもあゆまれ - たえずわたってゆ  
2. 主はいつもわたしを - みつめまねいてお



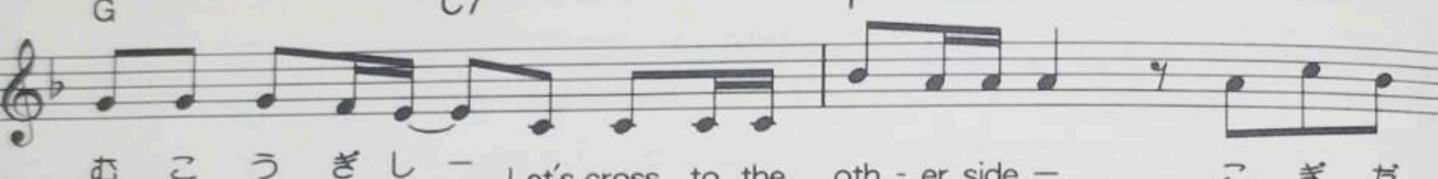
かれた - まだ 主はとどまるこ となく - ひと  
られる - だ からとどまら ないで - じ -



びとのこころのきし - べへ かなしおひとがいて - たお  
ぶんのこころのみ な - とに つたえるひとがいて - つか



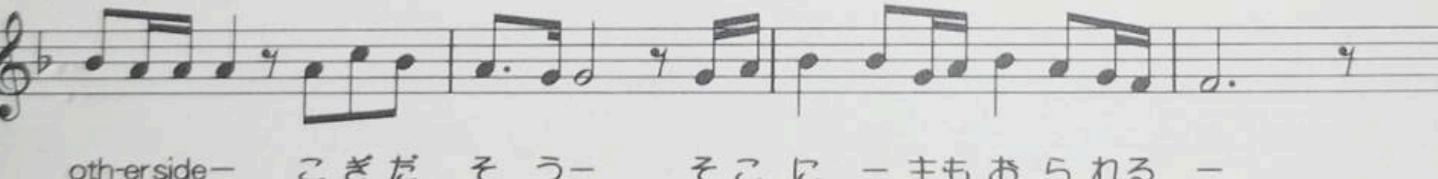
れるひとがいて - なく ひとがいる - そんな  
えるひとがいて - あい するひとがいる - そんな



おこうぎし - Let's cross to the oth - er side - こぎだ



そ う - そ こ は - 主がむかわれ た ばしよ Let's cross to the



oth-erside - こぎだ そ う - そ こ に - 主もあられる -

# 花も

G C D Em C D G C D

1. こ こに い ずみはわく なみ だ をすぎると き  
2. あ おげ て んはひらき ぼく ら はみるだろ う

G C D Em C D Gsus4 G

や がて みをむすび わら い ごえにみちる  
や がて はなはさき えい こうの 主がこられ る

G D C D G D/F# Em

は な も くもも かぜ もおおうみも かなで

C D G D7 C D

よ かなでよ イエス を そら に ひびけ うた

G D/F# Em C D G

え たましいよ めぐみ を めぐみ を めぐみ を

～2月の約束文～

私たちは、きよい心と正しい行いをもって、まことの道をあらわし、隣り人を愛し人々を救い主に導きます。

「隣り人を愛し」とは自分を愛するように誰にでも等しく、イエス・キリストが教えてくださった愛を実践することです。それは人間的な感情にとどまらず、相手を敬い、思いやり、大切な存在だと認めることです。

### マタイによる福音書 22章36－39節

「先生、律法の中で、どの掟が最も重要でしょうか。」イエスは言われた。『心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』これが最も重要な第一の掟である。第二も、これと同じように重要である。『隣人を自分のように愛しなさい。』

#### 1. 私たちの隣り人

文字通りに考えると、隣人とは私たちの隣りに住む人ですが、聖書の語る真の意味の隣人を理解するために、レビ記19章18節を見てみましょう。「自分自身を愛するように隣人を愛しなさい。」ここで出てくる隣人は原語のヘブライ語で**レアハ**(רֵאָה / re'a)と記されており、友だち、またはすべての人を表す言葉だそうです。つまり私たちはすべての人々を愛するべきなのです。とても立派な戒めですが、いろいろ考えれば考えるほど難しく、厳しい教えだな～と思ってしまう。自分の生活や仕事がすべて順調ならば、隣人を愛する心の余裕もあるでしょう。しかし、いつもすべてが順調です、なんて人はいないですよ。また、スーパーで店員に文句を言っている人、路上で子どもを叱りつけている人、混雑する電車で足を組んで座っている人、または自分と意見や考え方が合わずいつも衝突する人。世の中にはさまざまな人がいて、受け入れることに大きな決心や我慢が伴うこともあります。

旧約聖書は、貧しい人・弱い人（寄留者《滞在者》、寡婦《やもめ》、孤児）を虐げるのではなく、愛して助け守りなさいと神の命令を教えています。

イエスさまは「よきサマリア人のたとえ」から「私は誰の隣人となるのが出来るのか」を問いかけておられます。普段の生活で関わりのある人(仲間、家族、同胞など)だけでなく助けを求めている人は誰でも普段何の関りがなくとも「隣人」として受け入れ、イエスさまは愛されたのでした。

そういうわけで、イエスさまという人は時々、非常な、無理な、到底できなさそうな難題を私たちに要求してきます。それでもイエスさまははっきりとおっしゃいます。「隣人を愛しなさい。いかなるときでも」です。

私たちもイエスさまに従い、倣い行く者でありたいと願います。

### ルカによる福音書 5章27－28節

その後、イエスは出て行って、レビという徴税人が収税所に座っているのを見て、「わたしに従いなさい」と言われた。彼は何もかも捨てて立ち上がり、イエスに従った。

## 2. さあ、ついてきなさい

カファルナウムという町にレビという徴税人がいました。町中の嫌われ者でした。イエスさまはレビに近づき「わたしに従いなさい」と声をかけられました。するとレビはイエスさまの呼びかけに即座に応え、新しい人生を生きる決断をするのです。命の光であるイエス・キリストがレビの隣人になってくださったので、希望へと続く道を歩み始めることができたのです。イエスさまは私たちにも同じようにしてくださいませ。イエスさまはただひたすら神さまの愛を実践され、ご自身の救いを示し、私たちの罪を赦し、私たちが神を愛し、隣人を愛する歩みをさせてくださいませ。

### ヨハネによる福音書 13章34-35節

あなたがたに新しい掟を与える。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。互いに愛し合うならば、それによってあなたがたがわたしの弟子であることを、皆が知ようになる。

## 3. 愛を伝える器

神の愛によって日々守られ、命が与えられて生かされていることに感謝し、神がすべての人を愛しておられるように、私たちも分け隔てなく隣り人を愛せるよう祈り求めることが大切です。すべての人がこのことを実践できたなら、なんと素晴らしい世界になるのでしょうか！しかし、きっとほとんどの人が難しいと感じるでしょう。イエスさまだけがただおひとり神さまの愛を実践したお方でした。それなので私たちは愛を伝える器として用いられるように、イエスさまのお力を貸していただけるよう祈り求めなくてはなりません。

イエスさまが隣り人になってくださった町中の嫌われ者のレビという人は「わたしに従いなさい」というイエスさまの招きを受けて新しい人生を生き、後にイエスさまの弟子となり愛を伝える器となりました。私たちもレビと同じように招かれてキリストの救いに与るものとされました。レビは変えられました。私たちもキリストによって愛を伝える器に変えていただいています。助けを求めている人に寄り添う器でありたいと願います。教会では伴そう者の働きという奉仕があり働き手が求められています。



話してみましよう

- イエスさまがあなたの隣人になってくださったときのことを、分かち合ってみましよう。
- 隣人に対して「思いやりを示す」「共通点を見つける」「祈る」ことから始めてみましよう。
- イエスさまのことを証しするとき、助けとなるみことばや賛美歌はありますか？

～2月の約束文～

私たちは、きよい心と正しい行いをもって、まことの道をあらわし、隣り人を愛し人々を救い主に導きます。

イエスさまの福音の中心テーマは「救い」です。キリスト教の「救い」は単に問題を抱え困っている人に解決を与えるという意味ではありません。聖書にはすべての人が救いを必要としていると記されています。順風に人生を謳歌している人でさえ自分自身の内なる罪に気づかず神の栄光を受けられなくなっているために救われる必要があるのです。神はすべての人々を「わたしの目にあなたは価高く、貴く（イザヤ43:4）」と無条件に愛しておられます。先に救われた私たちは神の真理(イエス・キリストが神であると信じることを)を宣べ伝え、すべての人がイエスさまの呼びかけに応え、救いへと導かれますよう祈っていきたく願います。

### ルカによる福音書 8章22-25節

ある日のこと、イエスが弟子たちと一緒に舟に乗り、「湖の向こう岸に渡ろう」と言われたので、船出した。渡って行くうちに、イエスは眠ってしまわれた。突風が湖に吹き降ろして来て、彼らは水をかぶり、危なくなった。弟子たちは近寄ってイエスを起こし、「先生、先生、おぼれそうです」と言った。イエスが起き上がって、風と荒波とをお叱りになると、静まって風になった。イエスは、「あなたがたの信仰はどこにあるのか」と言われた。弟子たちは恐れ驚いて、「いったい、この方はどなたなのだろう。命じれば風も波も従うではないか」と互いに言った。

#### 1. 向こう岸へわたろう

イエスさまは弟子たちと共に舟に乗り込み、湖の向こう岸に渡るよう指示します。舟が向こう岸へ渡る途中でイエスさまは寝入ってしまいましたが、突風が起き弟子たちは水をかぶり、危機的な状況に陥ります。嵐に遭って慌てふためく弟子たちと、嵐を意に介さず眠り込むイエスさま、対照的です。そして弟子たちは必死にイエスさまを呼び起こします。猛烈な風が吹き舟が水没することを恐れていたからです。乗舟するときにイエスさまが言った言葉よりも、今自分たちに起こっている危機に心を捕らわれてしまっています。

#### 2 あなたたちの信仰はどこにあるのか

主に招かれ従い、弟子たちは舟に乗り込みました。「向こう岸へ渡ろう」この言葉を信じていれば、たとえ突然、嵐に遭おうとも慌てふためく必要はなかったでしょう。私たちも人生の嵐を経験することがあります。その嵐がなかなか過ぎ去らず疲れを覚えるときでも、絶望しそうなときでもイエスさまを信じるならば、神の言葉が私たちを守ってくれます。神は約束を必ず守られる方で、いつでも真実なお方です。「あなたたちの信仰はどこにあるのか」ルカ福音書は危機的な状況に陥ったとしてもイエスの力を信頼し祈ることの大切さを教えています。

新生讃美歌 391 「向こう岸へわたろう」という讃美歌があります。1番の歌詞に「主はいつも歩まれ、絶えず渡って行かれた。主は留まることなく人々の心の岸辺へ〜」と、向こう岸は主が向かわれた場所、主がおられる場所であると賛美し証ししています。

## ヨエル書 3章5節

主の御名を呼ぶ者は皆、救われる

## コリントの信徒への手紙一 15章10節

神の恵みによって今日のわたしがあるのです。

### 3. イエス・キリストを信じる

キリスト者として生きていても、この弟子たちのように慌てふためき、揺さぶられ、ブレることはたくさんあります。イエスさまを信じれば信じるほど、自分の価値観や生き方が、聖書的ではなく反対を向いているように感じることもあります。自分の限界を痛切に知ることもあります。

私たちの教会のミッションステートメントの第2項には「主にあって招かれるすべての人々と共に神の恵みに与り」とあります。人が自分の力で救われるのではなく、私たちが主の招きに応え、福音を信じるならば、神のみわざによって救われるのです。自分たちの生活や仕事でどんなに忙しくても、心に余裕がなくても、または嵐の真ただ中であっても「神の救いを信じます」と毎日、信仰告白することが大切です。そうすることで日々、新たにされ、救いへと通じる道へと導かれ、永遠の命へと続く祝福をいただくことができるのです。人は誰でも神を求める心を持っています。しかしまた、人は罪の性質を持つ弱い存在でもあります。「義に飢え渴く人々は幸いである、その人たちは満たされる。(マタイ5:6)」

自己中心の傲慢や虚無にならず、自分の弱さを告白し、全てを主に委ねてイエス・キリストを信じる信仰によって、人々は神の恵みによる無償の愛で罪赦されて、義(神との正しい関係)とさせていただけるのです。

## テサロニケの信徒への手紙二 4章14節

神は、このことのために、すなわち、わたしたちの主イエス・キリストの栄光にあずからせるために、わたしたちの福音を通して、あなたがたを招かれたのです。



話してみましょう

- 「あなたたちの信仰はどこにあるのか」と問うイエスからどんなことが感じ取れますか？
- また、その問いに対しての弟子たちの反応からどんなことが感じ取れますか？
- 「向こう岸へ渡ろう」というイエスさまの言葉は、今いるところから勇気を出して一歩踏み出そうというメッセージも含まれています。一歩踏み出す勇気について分かち合ってみましょう。

～2月の約束文～

私たちは、きよい心と正しい行いをもって、まことの道をあらわし、隣り人を愛し人々を救い主に導きます。

イエスさまは神のことばを人々に伝えるために地上に来られ、その働きを全うされました。今、イエスさまのその働きは教会と私たちひとりひとりに引き継がれています。私たちが神の愛と救いのよき知らせ(福音)を主の招きを受けているすべての人に正しく語り伝えるとき、そこに聖霊が働いてくださり、私たちすべての人が救い主に導かれるのです。

どんなに努力しても、どんなに志を高く持っても、人は自分で自分を救うことは出来ません。お互いに争い、傷つけあい、搾取する深い闇の現実を繰り返している罪ある存在から自力では解放することが出来ないことが人類の歴史から知らされています。神は全被造物に救いが必要であることを見通しておられ神の独り子イエスさまを助け手として私たちのもとへと遣わしてくださいました。

私たちは助け手であるイエスさまに救われました。そのイエスさまは「だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしてください。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。(マタイ28:19～20)」との命令をされているのです。

そのために私たちの教会はすべての人が救い主に導かれるよう働くのです。

### マタイによる福音書 9章35節

イエスは町や村を残らず回って、会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、ありとあらゆる病気や患いをいやされた。

#### 1. イエスの福音宣教

イエスさまはご自分から出かけて行き、ガリラヤ地方の町や村を残らず回って、人々を救いに導くため会堂で教え、神の愛を宣べ伝え、癒やしの奇跡を行い、精力的かつ丹念に働かれました。当時のラビ(先生)は弟子や生徒がやってくるのを待っていたそうですが、イエスさまは待っているだけではなく、一人ひとりに出会うために旅することを選ばれたのです。

イエスさまの宣教には大勢の群衆が集まったと聖書は証言しています。何が彼らを引きつけた魅力であったのでしょうか。第一に彼らを愛し(マタイ9:36)彼らの必要に応え(マタイ15:30)、彼らが興味をもつ譬え話(マタイ13:34)などで教えられました。すなわちイエスさまに出会い、み言葉を聴いた彼らは生活が変わられたと記されています。このことは時代を越えて私たちに伝道とは、宣教とは、を考える良い指標となります。

### マタイによる福音書 9章36-38節

また、群衆が飼い主のいない羊のように弱り果て、打ちひしがれているのを見て、深く憐れまれた。そこで、弟子たちに言われた。「収穫は多いが、働き手が少ない。だから、収穫のために働き手を送ってくださるように、収穫の主に願いなさい。」

## 2. 弱り果てた羊のように

羊はとても温厚ですが、とても怖がりで落ち着きを失いやすい動物です。群れの仲間と一緒にいることを好み、群れから離れると大声で鳴いたり、パニックになったりするそうです。イエスさまは人々のことを飼い主のいない羊のようだと言っています。羊飼いにしっかり守られていないと、羊は弱り果て打ちひしがれるのです。迷い出た羊は一匹では生きてはいけません。それゆえ、良い羊飼いは99匹の羊を牧場に残して探しに行きました。私たちの社会でも霊的に帰るべき場所の見つからない人、居場所がわからない人たちが教会の外にはたくさんおられるのです。教会で待っているだけでは多くの方は帰りつけないのです。

一方でイエスさまは働き手が必要ということも指摘され、働き人が起こされるように祈り求めることの大切さも教えておられます。それはイエスさまが深く憐れむほど、多くの方が霊的にも肉体的にも救いが必要だったからです。

## 3. 主の働き手

人々はローマ帝国の圧政のもとで、疲れ果てており、生きる意味を見出せずにいました。弱っている羊を霊的にも肉体的にも救ってくれる良い羊飼いに導くための働き人が起こされるよう祈ることが大切でした。それは今の私たちの課題でもあります。救いを待っている人がたくさんいるのに、それを伝える働き手が足りないのです。伝道は教会の使命（ミッション）です。その教会に繋がる私たちが、確信と喜びをもって「地の塩、世の光」として仕えていけたなら、弱っている羊を見つけて良い羊飼いのところに連れていく働き手となることができます。

また、イエスさまは人々のために(for)地上に来られ、人々と共に(with)おられました。イエスさまを見習い私たちが、待っているのではなく出かけて行って、救いのよい知らせをお伝えする勇気が与えられますよう祈り求めています。

## ヨハネによる福音書 14章31節

さあ、立て。ここから出かけよう。



- 福音を伝えたいけれど、隣人との距離の取り方が難しいと感じたことはありますか？
- 教会は喜びや困難を共有し合い、信頼し合う共同体ですが、もっといろいろ話してみましよう いろいろな方と会話し、交わりを持つにはどうしたら良いと思いますか？

～3月の約束文～

私たちは、主と会う日までこの約束を守ります。

アモス書 4章12節

わたしがこのことを行うゆえに イスラエルよ お前は自分の神と出会う備えをせよ

これまで長きに渡って「教会の約束」と共に学んできました。今日は「主と会う日まで」をテーマにみ言葉から学んでいきましょう。皆さんは、誰かと会う約束を楽しみにしていると思います。友人に会う、恋人に会う、家族に会う。コンサートで有名人に会う。誰かと会う約束には、必ず“待つ時間”があります。その時間は不安ではなく、むしろ喜びと期待に満ちています。私たちの信仰生活もまた、“主と会う日”を待ち望む歩みです。

イエスさまは私たちと会うために、三つの約束をしてくださっています。一つは、『過去、十字架の出会い』です。わたしたちを罪の子ではなく、神の子として下さる十字架において会う約束。わたしたちはこのことが分かった時に、わたしの罪やわたし自身を負って下さるために十字架に磔にされたイエスと出会うことが出来ます。十字架の上に釘打たれ、血を流されるイエスさまに、赦しの主にあなたは出会うことが出来ます。赦しの主との出会いが、私たちの信仰の出発点となります。

二つ目は『現在、聖霊の内住』です。「わたしはあなたと共にいる マタイ1:23」と言われるインマヌエルなる主イエスさまは、聖霊を通し、わたしたちの中に住んで(内住)してくださいませ。この人生においていつも神さまが共におられるということは、本当に変わらない平安と安心をわたしたちに与えてくれますね。わたしたちはこの聖霊の内住を受けつつ、同じ信仰共同体であるキリストのからだのひとつとされ、互いの心の配慮に努めます。神の家族と共にこの信仰を守ります。共におられる主が、日々の歩みを強めてくださいます。

三つ目は、『未来、再臨の約束』です。主は必ず来られ、その約束は揺るぎません。神さまは真実な方です。アブラハムとサラに対して神さまが言われました。「わたしはもう一度あなたに会いに来る。そのときには男の子がうまれているであろう。(創世記18:14)」との約束は真実に実現しました。神さまの約束は変わりません。イエスさまは「私は、あなたがたをみなしごにはしておかない。あなたがたのところに戻って来る。(ヨハネ14:18)」と約束されました。

キリスト教では、再びイエスさまがやって来て下さることを再臨と呼びます。そして再臨信仰は、イエスさまを救い主と信じる者たちの心を常に守ってきました。どんな迫害や恐れがあったとしても、必ず主イエスはこの世を治めるために来てくださいます。その時がいつやって来るのかは分かりません。ですがわたしたちは主イエスさまがいつ来られてもよいように、この心の備えをしておかなければなりません。

マタイによる福音書24-25章は再臨信仰と共に、終末について深くイエスさまが教えておられる個所です。その中に、世の終わりの裁きが始まる時、主はこのように言われます。

### **マタイによる福音書 25章34-40節**

『さあ、私の父に祝福された人たち、天地創造の時からあなたがたのために用意されている国を受け継ぎなさい。あなたがたは、私が飢えていたときに食べさせ、喉が渴いていたときに飲ませ、よそ者であったときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気のときに世話をし、牢にいたときに訪ねてくれたからだ。』

すると、正しい人たちが王に答える。『主よ、いつ私たちは、飢えておられるのを見て食べ物を差し上げ、喉が渴いておられるのを見て飲み物を差し上げたのでしょうか。いつ、見知らぬ方であられるのを見てお宿を貸し、裸でおられるのを見てお着せしたのでしょうか。いつ、病気をなしたり、牢におられたりするのを見て、お訪ねしたのでしょうか。』そこで、王は答える。『よく言うておく。この最も小さな者の一人にしたのは、すなわち、私にしたのである。』

この話では、再臨の主は既に私たちの現実の中におられ、そして私たちの世の光としての信仰の歩みの中で、主は出会ってくださることを約束しています。再臨を待つ者の姿は、ただ空を見上げて待つことではありません。主は“最も小さき者に仕えること”の中に、すでにご自身が来ておられると教えられました。主は既に最も小さき者たちの内に再臨のかけらを顕して下さっています。

イエスさまは「見よ、わたしはすぐに来る（黙示録3:11、22:7、22:12）」と3回約束しています。主がすぐに来られるという約束を信じる教会は、互いに支え合い、愛を実践しつつ、その日を待ち望む信仰共同体です。私たちが“教会の約束”を守り歩むことこそ、主と会う日の備えそのものです。

新旧66巻からなる神のみ言葉である聖書の最期の言葉をしっかりと胸に刻んで共に歩みましょう。

### **ヨハネの黙示録 22章21節**

これらのことを証しする方が言われる。「然り、私はすぐに来る。」

アーメン、主イエスよ、来りませ。主イエスの恵みがあなたがたすべての者と共にあるように。



話してみましょう

- 再臨信仰は、あなたにどのような希望を与えていますか。
- いつ、主イエスさまが来られてもいいようにあなたが備えていることを教えてください。

～3月の約束文～

私たちは、主と会う日までこの約束を守ります。

ヨシュア記 23章14節

あなたがたは心を尽くし、魂を尽くして知りなさい。  
あなたがたの神、主が約束されたすべての恵みの言葉のうち、  
実現しなかったものは一つもなく、ことごとくあなたがたに成就した。  
私たちに実現しなかった言葉は一つもなかった。

詩編 119篇57節

主は私の受ける分。 あなたの言葉を守ると約束しました。

結婚とは契約です。通常、結婚式においてカップルはどんな時にあっても変わらずにこのパートナーを愛することを互いに約束します。「はい、誓います/約束します (マルコ10:9)」との約束に基づいて、二人の愛の関係性は成り立ちます。そこにおいては生涯、他の異性を求めないこと(コリント一7:3)、互いに愛し合い(エフェソ5:33)、仕え合うこと(エフェソ5:21)が求められています。

信仰生活は、主なる神との結婚生活を送ることです。神さまを愛し、神さまに仕えることを約束して歩いていくものです。これは私たちの誓約です。神さまがわたしたちに約束された愛はヘブライ語でヘセドの愛です。日本語で「慈しみ」と訳されるヘセドとは、状況に左右されない「約束に基づく愛」、言い換えれば「決して見捨てない愛」です。それはどのようなことがあっても愛しぬく愛、無限の神の愛です。このヘセドに言い表された神さまの救いと愛を主はまず先に約束されました。わたしたちはこの恵みと愛に感謝して歩むことを誓約してバプテスマ(浸礼)をうけ、同じ信仰を持つ人々と共に信仰生活に入りました。

「教会の約束」は神さまとの契約関係に生きることを約束したものです。私たちは次の3つを大切にしています。

1. イエスさまが無条件に示して下さった神の救いの恵みに応答して主体的に信仰生活をおくることを約束します。
2. その約束に誠実に生きることを大切にします。
3. 常に教会の約束に立ち帰り、初めの愛に基づいて生き直します。

バプテストの始まりは17世紀の英国にさかのぼります。教会と国家の癒着が避けがたかった時代、自立した信徒の群れの教会としてバプテスト教会は起こりました。自分たちで聖書を読み、聖書を教え、自分たちが献金し、自分たちが教会を運営し建て上げ、そこにいる人々の信仰を養い導いていく、この自立性の中で教会契約は生まれ、大切にされてきました。そこにおける基本は、自覚的信仰に基づく信仰告白と、浸礼でした。ご存じの通り、バプテスト教会が幼児洗礼を退けてきたのは、真実な教会とは神の救いに応答した自覚的な信仰者の群れであることが聖書によって見いだされ強調されたからです。

聖書の教会論を聖書より見出してこれに突き抜けていった、ここにバプテスト教会の起こりがあります。「教会の約束」は聖書にまとめて書かれてあるわけではありませんが、信仰生活を聖書より見出してこれを神さまとの契約とする、そこにバプテストの起こりがありました。

それは聖書がわたしたちになしている救いの契約に基づくものです。すなわち、イエス・キリストを救い主として与えられている私たちは、キリストとの新しい契約に与かる信仰共同体であり、その契約に生きる交わりを大切にしてきました。「この杯は、わたしの血によって立てられる新しい契約である(Ⅰコリ11:25)」との主の言葉は私たちを救いに招く言葉ですが、バプテストの信仰者達は「血によって」起こる、すなわち十字架によって新しく刻まれるわたしたちの自覚的応答として、信仰の契約共同体に生きることを新しく約束することを見出しました。

現在常盤台バプテスト教会では主の晩餐において教会の約束をまず先に唱和しています。そして、これからのバプテスト教会として、バプテスマ(浸礼)時において教会の約束をこれからバプテスマを受ける方と信仰共同体が共に唱和しても良いと、この学びを通して私は示されました。

信仰生活は、神さまとの契約関係に生きることです。しかしこれはなすべきものとしての律法ではなく、心から喜んで感謝して生きる、信仰の在り方です。「誓う」という言葉は「めぐみ」とか「さいわい」に置き換えることが可能であるそうです。本来の「誓う」という言葉は、相手のために何ができるかを第一とする言葉なのです。だから、教会の約束(誓約)とは教会のめぐみであり、教会のさいわいです。神さまを喜びとしつつ、歩んでいきましょう。

聖書の言葉を皆さんに贈ります。

花婿が花嫁を喜びとするように あなたの神はあなたを喜びとする。

イザヤ書62章5節

神さまがあなたを花嫁のように喜ばれる——その祝福の中を歩めますように。神さまが先に誓ってくださった愛に答えて、私たちもまた喜びをもって歩み続けましょう。



話してみましょう

- 神さまとの結婚生活を喜びと恵みの内に歩いていくために信仰共同体としてとくに意識して励んでいることがありますか。
- また信仰を深めていくために神さまに対して約束していることはなんですか。

#### 【参考】

「バプテスト教会が神、および会員相互と結ぼうとした契約とは、あくまでキリストの新しい契約(即ち十字架による一方的な贖罪の恵み)を前提とした、信徒の主体的な信仰生活の実践に関する約束であったということなのです。つまり、律法の業によらず、信仰のみによって救われるという福音を受け入れ歩む信者が、自分を甘やかして、不信仰な状態に止まり続けることがないように、バプテスト達は人間の側からの誠実な約束を(神及び信徒相互において)喜んで結ぶことを提唱したのでした。」

『バプテストの教会契約』より P21

## 3/22 第38課 「この約束を守ります—会衆との誓約—」

～3月の約束文～

私たちは、主と会う日までこの約束を守ります。

### マタイによる福音書 18章18-20節

また、はっきり言うておくが、どんな願いごとであれ、あなたがたのうち二人が地上で心を一つにして求めるなら、わたしの天の父はそれをかなえてくださる。

二人または三人がわたしの何よって集まるところには、わたしもその中にいるのである。

米国日本人伝道に携わっていた時、NC州の首都ラーレー(ローリー)にある第一バプテスト教会を母教会として同じ建物の中で独自に日本人礼拝を行っていました。しかし救われる日本人が与えられバプテスト式をする際は英語礼拝の中で一緒に祝って頂く幸いな交わりが与えられていました。その教会は1812年に設立され、第一と呼ばれるように、文字通りその町で最初の伝道拠点となり発展を遂げて行きました。その教会のバプテスト式に出て驚いたことがあります。それは、日本と同じように「あなたはイエス・キリストをあなたの救い主として信じますか」と問いますが、その後、牧師は会衆に向かってこう問いかけるのです。「あなたがたは、今日ここでバプテストを受けるこの姉妹(兄弟)を受け入れ、この人と共にキリストの体なる教会を支えていくことを約束しますか」。すると会衆は心を合わせて力強く「アーメン」と唱えます。そして浸礼後、バプテストリー(洗礼槽)から出ていく時、牧師はその人の唇に塩を乗せ、ロウソクの火を手渡して宣言します。「あなたは、地の塩、世の光として歩みなさい」と。このバプテスト式のやり方に感銘を受け、その教会はもちろん、長崎で牧会を始めた時、それを取り入れて(お塩は省略)行っていました。

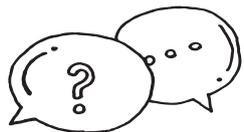
「教会の約束」を締めくくる最後のキーワードは、改めて「約束」「契約」「誓約」の3つです。

「誓約」とは、人が誰か相手に対して一方方向で誓う時に使います。ご存じのように本来この「教会の約束」と日本語訳の原文は“Church Covenant”、つまり「教会契約」と訳されるべきものでした。しかし、日本で「契約」という言葉は、法律用語の意味合いが強く、それに反した場合は罰を伴う厳しい響きを含みます。実際、初期バプテストの教会形成では、教会規律に反した場合、教会会議(総会)にか、除籍の処分も辞さないこともありました。もちろん今でもその可能性を含めた教会規則は常盤台を含め多くの教会が定めています。けれども教会とは裁き合う場ではなく、キリストの愛と赦しを第一に実践する場ですから、「契約」ではなく「約束」という言葉を用い、キリスト教的背景のない日本人への配慮もあったことも事実です。と同時に、人間の弱さを深く憐れみ、その弱さを共に担って、神の愛を示された主イエスが、「誓ってはならない」(マタイ5:35)と言われた主イエスに倣い、結婚式の誓約でも新郎新婦が「誓います」ではなく「約束します」と交わすように、主の御言葉に従い、そのようにしたことも大切な選び取りでした。

旧約聖書に、神は当初、神の一方的な恵みと選びをイスラエルの民らに与えられました。それは正に神の「誓約」でした。けれども出エジプト以降、神はモーセを通して神の民との「契約」を結び、それ故に、旧約の民は主なる神との「契約共同体」と呼ばれていくのです。しかし誠実な神に対し、何度も神の民らは背き、裏切り、神を悲しませました。そこで神は遂に、愛する御子イエスをこの地上に送られた新約時代から今に至るまで、主イエスは「神を愛する」という神と人の契約のみならず、「互いに愛し合いなさい」との新しい掟（マタイ22:37-39：第29課参照、ヨハネ15:12）を与えられたのです。つまり、神と神の民(今日のキリスト者)との契約に留まらず、主イエスの新しい掟である、神の民ら（今日の教会）でお互いに交わし合う契約の大切さを示されました。冒頭で紹介した教会のバプテスマ式の形式は正に、受洗する人が神と交わす契約と共に、神の民となる受洗者を前に、既に神の家族とされた教会員が神の前にも、また新たな信仰の友となる人に対しても、契約(約束)を誠実に交わす大切な信仰継承が表されていたと、この課の学びを通し、改めて思い起こすことができました。

今、私たちは『主の晩餐式』の中で、この「教会の約束」を毎回唱えつつ、神の不思議な導きの中で、バプテストの信仰を告白するキリストの教会に集められています。今日の聖句は、人数が多いからそこは教会となるのではなく、二人三人という少人数でも、集う人が様々な違いを越えて、心を神に向け、天を見上げる信仰を一つとする時、主イエスが共におられ（臨在され）、神の業が現わされる喜びと平安、そして希望と恵みの約束です。

「主の祈り」「教会の約束」、そして会衆讃美を奉げる時、皆さんは周りの方々の言葉に心を合わせて読み歌う、信仰の配慮を心がけておられると思います。この小さな信仰的な愛の決断と交わりが深められる時、教会は大きな神の業を託される、神に信頼される教会としてこれからも小さな交わりと共に大きな働きも担う教会として次なる時代、100年目をも迎えることを信じます。



話してみましょう

- 「信仰」は神とその人の関係と交わりであることは真実です。と同時に、「信仰」は神によって出会わされた隣人共に歩む関係と交わりを大切にすることでもあります。今、それぞれの交わりにおいて、喜びと困難を覚える時、どのようにそれを乗り越えた経験がありますか。
- 冒頭で紹介したバプテスマの形式、この常盤台教会でも取り入れたいと思われましたか。その他に、この「教会の約束」を学び、この教会で取り入れたいと感じていることがあれば、ぜひ分かち合ってみましょう。

～3月の約束文～

私たちは、主と会う日までこの約束を守ります。

ヨハネによる福音書 15章5節

わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ。わたしを離れては、あなたがたは何もできないからである。

遂に長い一年の分かち合いの旅を終え、今日の39課でゴールインとなります。正に39課、サンキュー。これまで執筆に関わって下さった教会員の方々に「ありがとうございます」と、感謝をお伝えされてください。この「教会の約束」は、バプテスト教会がイギリスで誕生以来、各教会が自主的に取り入れ、大切にしたいと願っていた祈りと目的の一つ。それは、“信徒の教会”となることでした。つまり牧師だけが奉仕するのではなく、教会員の賜物が活かされる教会となることです。今回39回の執筆の殆どは、教育部の呼びかけに応え、幾人もの教会員が喜んで執筆に携わり、このゴールを迎えたこと。日本語では手前味噌と言ひ余り好まれませんが、英語で互いを褒め合う言葉を使って私は声を大にして言わせて頂きます。I am very proud of this church, 私はこの教会を誇りに思います！と。何よりも常盤台教会75周年の最大の遺産としてこのテキストが用いられ、次なる100周年を目指すために必要とされるなら、改訂版を共に生み出す力が注がれますことを祈ります。

さて、今日の学びを終えて、ホッと一息し、感謝をすることは当然ですが、主は更に私たちに對して、次なる信仰の旅路に着くことを願っておられます。この約束を神と人々(教会員)に交わすのにはもう一つの目的を信仰の先駆者たちは示されていたからです。それは主イエスが復活後、弟子たちにキリストの教会を形作るために必要な教えを語られた最後にも言い尽くされています。

「だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にきなさい。彼らに父と子と聖霊の名によってバプテスマを授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」(マタイ28章19-20節)

つまり、約束文を何度読み続け、頭で理解して終わることがゴールではありません。本当のゴールとは、教会員一人ひとりに神が与えられたそれぞれに異なる賜物(タラント)を用い、教会内にとどまらず、家庭・学校・会社など、この社会、そして広い世界へ出ていくこと、そしてそのような神の子ども達を育み送り出すことだからです。

キリスト者は主イエスの言葉とその行動に感動と感謝を覚え、主のみ足跡に従う群れです。主イエスが復活された後、実に多くに人々にそのお姿を現わされた理由に、一度主を信じ従うと告白(誓約・約束)しながら、様々な事情で離れてしまった方々に対する深い思いを持っておられたことが分かります。エマオへの道すがら、主がクレオパともう一人の弟子に表れたのは、主がこの世に来られた真の目的を誤解し、十字架で死んだままと思って失望し、故郷エマオへ帰ろうとした彼らに現れ、改めて聖書全体を解き明かいし彼らの旅に同伴(伴走)されました。特にルカはこの記事の中で、「イエスはなおも、先へ行こうとされる様子だった(ルカ24章28節)」とします。きっと今も私たちが信仰の道に迷う時、共に寄り添っておられるに違いありません。

そうです。私たちも「教会の約束」を39回に亘って、その約束の言葉が聖書から、そして主なる神が私たちに願っておられるこの人生を祝福と喜びに溢れる旅として続けるための信仰と知恵を分かち合うことを感謝しつつ、更に主が示される次なる福音宣教の業と奉仕に向かって参りたいと願います。

主イエスは個々人と教会とをぶどうの木に譬えられました。これからも教会員だけではなく、更に多くの人々がキリストの体なるこの教会につながり、それぞれの人生で豊かな実を結び、その実を多くの方々に届けるのが今回の学びの真の目的です。今、この世界は、自己中心という神に背く罪に染まり、破滅へと向かっているかのようです。しかし私たちはいかなる時代においても、身体も心も魂にも多くの痛みと渇きを覚えておられる方々に、主イエス・キリストの愛と救し、そして希望の福音の実を恐れずに分かち合う教会として歩み続けて参りましょう。

最後に、福音に触れたケルト族に伝わる小話をお届けします。ある村に怠け者の息子二人がいました。自分の死期が近いと悟った父はその村の賢者に相談しました。すると賢者は早速二人の息子に会いに行き、こう伝えたのです。「あなたがたのお父さんのぶどう畑には宝が埋まっているのを伝え聞いていた。しかしそれがどこにあるか分からない」。すると、二人の兄弟はその日から荒れ果てたぶどう畑の土地を隅々まで、毎日宝を捜すために掘り起こしたのです。しかし、宝はどこからも出てきませんでした。しかし、何とその年のぶどうの収穫の時、その畑のぶどうの木はそれまでにない程の多くの豊かな実を結び、その後、この兄弟は父の願っていた以上に働く喜びと共に、与えられたぶどうを村中の人々と分かち合い幸せに暮らしました・・・。

常盤台教会もこの「教会の約束」の学びを通して、これからこの言い伝えが現実となることを信じて祈りつつ、この学びを終えます。

- あなたはこの旅路を終え、常盤台バプテスト教会に今ある「教会の約束」の中で改訂したい、又は付け加えたいと思われた信仰の言葉がありますか？



話してみましょう

- 参考：ある教会の文には、「才能(賜物)を高め合う」「魂を危険から守る」「密室の祈りを大事にする(家庭礼拝と訳された原文)」などがありました。
- この旅路を終え、次に信仰生活を豊かにするため、また主エスの願いである「大宣教命令」に従って、あなたは、教会内で、この地域、そして世界に出て行って、まず取り組みたいと思われたことはなんですか？

